



TITLE:

<批評・紹介>平岡武夫譯顧頡剛著  
古史辨自序

AUTHOR(S):

小川, 茂樹

---

CITATION:

小川, 茂樹. <批評・紹介>平岡武夫譯顧頡剛著古史辨自序. 東洋史研究  
1940, 5(5): 373-375

ISSUE DATE:

1940-09-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/145703>

RIGHT:

## 批評紹介

平岡武夫譯  
顧頡剛著 古史辨自序 創元支那叢書三

昭和十五年六月十五日、創元社發行  
四六版二三二頁、定價壹圓五拾錢

支那古代史家、特に疑古學派の領袖として盛名久しい顧頡剛氏の名著古史辨自序が平岡武夫君によつて極めて流暢な國語に翻譯され、創元支那叢書の一として出版された。顧氏が讀書雜誌に發表した古代史に關する自己の論文と之に對する錢玄同・胡適・劉揆黎等の批判を編輯して古史辨第一冊を公にしたのは今から十四年前、昭和元年のことである。顧氏が「大正十二年讀書雜誌に載せた「錢玄同に與へて古史を論ずるの書」のなかで夏王朝の始祖とされてゐる禹が西周時代までは神話上の一の神格であつて夏王朝と關係が無かつたが、東周時代になつて始めて夏王朝の始祖として人間化された。禹に先だつ聖帝堯舜の事蹟は孔子時代及びそれ以後に成立したものであり、更に古い神農黃帝は戰國時代以後に附加せられたものである。歴史上の實在人物として無條件に信用されてゐた黃帝・堯・舜・禹が神話上の神格であつて、此等を中心として構成された虞夏の歴史は神

話傳説の後代に於ける歴史化に過ぎないと主張した。此の論文は支那の學界に非常な衝動を與へたと見え、錢玄同・胡適の兩師は之に賛成して激勵の辭を惜まなかつたが、劉揆黎・胡堯の二人は猛烈に反對し、その批判の論文が同誌に現れ、殊に劉氏は執拗に再次に互つて顧氏との間に激しい論戰を展開した。主に此等の討論を集録した古史辨第一冊の卷頭に附せられた百頁に餘る長文の自序が今回平岡氏の翻譯紹介せられた原文なのである。このやうな古史辨の成立の事情から既に明らかな如く、この自序は元來自己の古代史研究に對する他の批判への自己辯明の性質を持つ。支那の古典に現はれる黃帝堯舜等の上古聖王の事蹟が其儘の史實でないことと云ふことが白鳥・内藤兩大家により早く提唱せられ、又那珂博士によつて崔述の考信錄が古くから紹介せられてゐる我が東洋史學界にとつて、この顧氏の議論は決して目新しいものとは云へない。然し支那に於ては事情が全く異なる。前清の經學を繼承した民國初年の支那國學者達は經書の記述に絶對の尊信を拂つてゐたのであるから、此顧氏の經書に傳へる古史が偽史であるとする辨證を不稽否不敬と目して之に痛烈な反對を試みたことは固より當然である。劉氏の批判も顧氏の所説に對し同情ある様に裝つては居るが、實は「この様な逆説的の議論と懷疑の精神は人心に影響する所少くない」ことに慨した所に動機が存在する。顧氏の自己辯明の序文は、

彼の古史研究方法が單なる一時の思ひ付き、或は場あたりをねらふものではなく、自身の性格境遇教養から必然的に發生して來た過程を詳述しようとする。そこで自序は氏の生ひ立ちを語るものとなり、半生の自叙傳と云ふ形式をとつたのである。

顧頡剛氏は蘇州の有名な舊家の出身である。氏の幼年時代の叙述は支那讀書人の家庭生活、特にその教養の實情を示す好き記録である。青年學生時代の梁啓超・康有爲・章炳麟の思想の感化を語る節は、清末民國初期の支那思想界の激動期の側面史として興味がある。しかし此自序を讀む者の興味、自序の價值は顧氏の古代史研究方法確立の過程を縷述した點にあることは言を俟たない。

氏はその學統からすれば今文派の康有爲の系統を引くものではあるが、古文派の章炳麟の講席に列したこともあり、相當の影響を受けてゐる。氏が文獻批判に於て取つてゐる合理主義は今文・古文と云ふ如き理性の外なる權威、傳統に基礎を置く所謂門戸の見から超越した科學的な態度から生れたものである。主として胡適氏を通じて西歐の思想の影響を多少は受けてはゐるものゝ、此の批判的精神の形成にとつてはこの影響は決定的ではなく、寧ろ少年時代の古典教養時代に萌し、次第々々に生長したものであると云はれてゐる。主として支那の古典文獻の讀書自體から自然に感得せられたのであるが、又讀書以外の多

面的な教養、經驗が之に重要な糧を與へてゐる。顧氏の古代史研究方法の特色は「各時代の時勢に準據して各時代の古史を闡明する」(一四七頁)ものである。今迄不動の歴史事實と信ぜられてゐた經書史籍の古史記事を一の故事傳説と見做してその變化の過程を見ようとするものである。この考へ方は胡適氏の近代文學・水滸傳・紅樓夢の考證に暗示され、北京大學生時代戲劇に心酔した頃得た戯曲に現れる人物の被る多様な潤色の熟知、更に決定的には民俗學運動に参加し、孟姜女の説話を研究した結果の古史への應用である。氏は「説話は文化の中心に隨ひて推移してゆき、各地の時勢と風俗の影響をうけて改變し、民衆の感情と想像とによつて發展することを切實に教へられた。また説話の變形してゐるそれ／＼の異つた様相は、單純に語り手の意念に従つたものもあり、また説話の節目を新解釋せんとする語り手の要求に従つたものもあることを切實に教へられた。さらにこれらの説話の意味の側から考へるならば、説話のもつ背景と説話のために主張するところのある各種の社會を明瞭にすることも出来るのである。」(一五三—一五四頁。此の末段は原文では「又使我明瞭它的背景和替它立出主張の各種社會」とあるが、この譯文では一寸意味が不明である。」と云ひ、その後、孟姜女の説話と傳説中の古史とを比較してゐる。

顧氏が西歐の學術の影響から獨立して主として自己の支那古

典の讀書と民俗學的な體驗から得たこの古代史研究方法は實に優れたものであつて、吾人は氏の天才に感嘆せざるを得ない。宜なるかな此の古史辨自序に提唱した研究方法はのちに古史中の種々の問題に應用され、近年の「戰國秦漢間人的造偽與辨偽」「禪讓傳說起于墨家考」「夏史三論」の如き名論文を輩出するに至つた。

顧氏は自己の古代史研究のプランとして「まづ古代の史實をなんとか明白にし、その後改めて各種の書籍の時代と地域を考究し、それが明かになつてから、そのうちらで、其の時其の地の傳說中の古史を抽出し、體系的整理を加へ、さらに考古學を研究して實物を審定し、民俗學を研究して傳說中の古史の意味を認識しよう。」(一三七頁)としたが、その分野を縮少して「一は説話の見地から古史の構成原理を解釋すること、二は古今の神話と傳説を體系的に叙述すること」(一三八頁)の二方面に限らうとしたと述べてゐる。説話の見地から古史の構成原因を解釋する方面の研究は着々として實現されたが、二の古今の神話と傳説とを體系的に叙述することの方は、孟姜女傳説以後殆んど試みられてゐない。この方面は實は西歐の神話學・民俗學・宗教學の助力を借らずしては不可能な事業であつて、恐らく氏の學術の限界外にあるのではないかと考へられる。

古史辨自序の文學的價值については門外漢である評者の關す

る所ではないが、この翻譯によつても全編を貫く情熱と誠實は讀む者の心を打つものがある。今北京留學中、顧頡剛氏と親交し、氏の學術の最も好き理解者である平岡君の手に成る流麗な翻譯によつて此の好著が日本の學界、否一般讀書界に贈られたのは何よりの喜びである。

〔小川茂樹〕

## The Wandering Lake,

by Sven Hedin.

London: G. Routledge, 1940.

XL + 298 pp. 18 s.

一九三三年の十月から翌々三五年の始めにかけて、ヘーデン博士は國民政府の委囑によつて支那本部と新疆省との間をつなぐ自動車道路建設のための調査旅行を行つた。その間の見聞を述べた一般向きの探險旅行記が「大馬の逃走」、「絹の道」、「さまよふ湖」の三部作となつて世に出たのであるが、そのうちの第三がこの本である。第一のものと第二のものととは早くに書かれて、既に邦譯も「馬仲英の逃亡」(小野忍譯、改造社版)、「赤色ルート踏破記」(高山洋吉譯、育生社版)と題されて出てゐるが、この第三の英譯版を手にしたのは最近のことである。(もつとも、瑞典語版と獨譯版とは一九三七年に出てゐたらしいが、見る機會がなかつた。)